

米国マサチューセッツ大学アマーフト校とワークショップ 「帝国の世界秩序とその後」を開催

3月16日（月）・17日（火）の2日間、スラブ・ユーラシア研究センターで国際ワークショップ「帝国の世界秩序とその後：20世紀の中東におけるアメリカとソ連の勢力圏の興亡」を開催しました。本学の戦略的国際パートナー校である米国マサチューセッツ大学アマーフト校（UMass Amherst, UMA）との共催で行われたこのワークショップは、1年前の3月に共催したオンライン・シンポジウムで得た興奮と着想を発展させたものです。UMA側の組織者は、ユダヤ・近東学部長のデイヴィド・メドニコフ准教授です。本センターは令和4年度より、文部科学省の「教育研究組織改革分」の概算要求として得て、「領域を超えた地域研究振興のための拠点形成」とその関連プロジェクト「国際的な生存戦略研究プラットフォームの構築」を遂行しています。

このプロジェクトは、欧米中心の世界秩序が終焉を迎えつつあり今後の世界の戦争と平和がロシアと中東に係っているという見立てを持ってきました。UMAの中東研究者との協力は、本センターが担う地域研究の機能を強化し拡大する上で極めて重要な意味を持っています。

欧米主導のグローバル化の始まった1870年代からそれが終焉を迎えようとしている今日までを「長い20世紀」と捉え、英国/米国とロシア/ソ連が中東の諸国と諸民族と紡いできた複雑な関係について、2日間で6つのセッションを設けて議論をしました。中東における帝国主義と戦争の歴史は、重層的な現地アクターの旋律を捉える対位的なアプローチが有効であり、これは他の地域でも有効であること、国家と社会との垂直方向の相互関係と合わせ

て、抵抗する人びとの抵抗の水平方向の連帯も統合的に考察することが肝要であること、グローバルな資本主義は地域の資源を確保するために、その調整役として権威主義体制を必要としていること、グローバルな流通の変化が小さな民族の手工芸も変容させること、帝国の存在と交渉することがナショナリズムや国家の輪郭を規定している一方で、大きな変化の契機を作り出しているのは大国ではなくむしろ中東の人々自身であること等が論点となりました。折しも、米国とイスラエルがイランと戦争を始め、ウクライナ戦争とも連動するようになっていきますので、ワークショップは大きな関心を集め、2日間の参加者は海外からも含め会場とオンラインで延べ231名でした。

（スラブ・ユーラシア研究センター）



2日目午後のセッションの様子



集合写真